

パネルディスカッション

259

南米日本語教育のビジョンと今後の課題ーパネルディスカッション報告ー
福島青史(国際交流基金サンパウロ日本文化センター)

「南米日本語教育のビジョンと今後の課題」

ーパネルディスカッション報告ー

福島青史

国際交流基金サンパウロ日本文化センター

1. はじめに

本稿ではシンポジウム最終日に行われたパネルディスカッションの記録を残し、シンポジウムの成果と今後の課題を報告する。本報告は、パネリストの発言を文字起こしし、そのまま記録するものではなく、シンポジウムそのものの総括にもなるよう、パネリストの発言意図を報告者がまとめ、引用する形をとった。その際、南米、日本語教育関係者以外の読者を想定し、情報を加えたり、表現を書き換えたりした部分もある。本稿草稿はパネリストに回覧し、発言意図とのずれがないかを確認した。また、シンポジウムでは、「南米で利用可能な資源」「人材像」「教師像」など、シンポジウムのテーマに沿って、会場の参加者から意見を募った。シンポジウムの成果の一つとして「参考資料」として添付する。本文中の強調は報告者によるものである。

2. パネルディスカッション概要

テーマ：「南米日本語教育のビジョンと今後の課題」

パネリスト：①日本語教師パネリスト（7名）、各団体パネリスト（6名）

①日本語教師パネリスト：

【ブラジル】横溝みえ（アチバイア大学大学院）、渡辺久洋（ピラール・ド・スール日本語学校）、末永高橋輝美サンドラ（国際交流基金サンパウロ日本文化センター）

【ボリビア】井上久美（オキナワ第一日ボ学校、日語部校長）

【パラグアイ】秋山碧（アマンバイ日本語学校校長、パラグアイ教師会会長）

【アルゼンチン】山本カーリーナ（在亜日本語教育連合会日本語教育センター研究員）

【ペルー】多嘉山アントニオ（ペルー日系人協会日本語普及部）

②団体パネリスト

【国際協力機構、以後 JICA】中野直美（企画調査員）

【ブラジル日本語センター、以後 CBLJ】鶴田広子（教務主任）

【国際交流基金サンパウロ日本文化センター、以後 FJSP】洲崎勝（所長）

【「南米日系社会における複言語話者の日本語使用特性の研究」(H28-32 科学研究費補助金基盤研究 B) 研究チーム、以後科研】松田真希子（代表）

【サンパウロ大学、以後 USP】モラレス松原礼子

【人文研】細川多美子（理事）

進行：福島青史（FJSP）

パネルディスカッションの目的：

本パネルディスカッションでは、日本語教師（日本語教師パネリスト）と日本語教育関連団体の代表（団体パネリスト）を集め、それぞれの視点からシンポジウム開始時に掲げられた課題について討議・検討を行った。なお、シンポ企画にあるシンポジウムの課題は以下の通り。このうち課題①はシンポジウムの各発表で判明済み。よって、ディスカッションでは課題②～④について議論した。

シンポジウムの課題

- ① 現在、日系社会はどのような社会言語状況であるのか（言語状況、日本からの帰国生の存在など）。言語的・文化的資源はどのようなものか。
- ② 南米の言語的・文化的資源を基盤とした南米の日本語人材（日系、非日系を問わず）はどのような社会をめざすのか。南米、日本、世界の地域社会にどのような貢献ができるのか。
- ③ 日系社会は日本語をどのように位置づけ、どのような日本語教育を目指すか。
- ④ 日本語教育の中長期的な目標は何か。それを実現するために、どの団体がどのような形態で臨むべきか（日系団体、研究機関、CBLJ、大使館、JICA、JF の役割）

3. 南米の日本語人材、目指すべき社会とは？（課題 2）

課題②

南米の言語的・文化的資源を基盤とした南米の日本語人材（日系、非日系を問わず）はどのような社会をめざすのか。南米、日本、世界の地域社会にどのような貢献ができるのか。

3.1 課題②：報告

日本語教師パネリストからは、「日本語人材」という語に触発されて「子ども」、「帰国生」、「バイカルチュラル」といった語が並んだ。これらのキーワードは、一般的に、「学生、成人」に対する「言語」の教育を中心とする海外の日本語教育と対照的で、南米の資源を背景とした特徴的な人材像であるといえよう。

【パネルディスカッション】

- ・ 試験だけでなく、子どもたちがやりたいことを引き出せる授業。できないと思っていることが、できるということを教えたい。待つということは大切。(アルゼンチン・山本)
- ・ ペルーには帰国生が増えており、その子供達を日本語人材として育てていきたい。子どもたちが活躍できる場を確保したい。(ペルー・多嘉山)
- ・ 今の自分のような人を育成すればいいと思う。両方の文化がわかり日本とブラジルあわせ持つ人間。バイカルチュラル。(ブラジル・サンドラ)

団体パネリストからは、「ファシリテータ」、「ネットワーク」といった語が出された。これは、日本とブラジルを「つなぎ」、その関係を「調整する」人材であるが、同時に、日系と非日系、日系の世代間でも、その働きが期待できよう。上記、「バイカルチュラル」でなければ果たせない役割である。

- ・ ファシリテータを育てる。 国際交流基金のミッションは、日本の文化を海外に紹介し、海外の文化を紹介し、日本と海外の相互理解を促進することである。日系であれ非日系であれ、日本語を勉強した人が、交流することで日本とブラジルの関係がよくなる。(FJSP・洲崎)
- ・ 帰国生は、ブラジルと日本両方の文化、言語、ネットワークを持った人材だ。ブラジルでは、様々なネットワークがあり、県人会活動も盛んだが、帰国生はブラジルから帰ってきたブラジル県人会と考えるといい。日系社会のリソースを使い、帰国生をバックアップしてほしい。(科研・松田)

一方で、これらの人材を育成するのに、評価の対象となる能力が測りきれていないという指摘もあった。これは、以下の「5.1.2 今後の課題、提案」にもつながる指摘であった。

- ・ 日本からの視点からみると、ブラジルのオラリティ（話す/聞く）の高さが認められる。ブラジルでは JLPT（日本語能力試験）受験が盛んだが、JLPT は言語知識が中心となり、ブラジル日本語環境を反映したオラリティ能力が適切に評価できない。また、バイカルチュラルが持つような、相手に配慮したりする能力も測れない。(科研・松田)

最後に「資源」「人材」といった人間を社会への機能面から捉える概念を止揚する「個人の幸せ」という意見が出される。ブラジル/日本、日系/非日系の区別を超えた一人の個人の可能性を尊重し、そのための能力を育成するといった教育理念である。

【パネルディスカッション】

- ・ 日本語学校で教育することは、日本語だけでなく、認知能力、非認知能力などいろいろある。文協の人は日本語への期待が高いが、現場の教師たちは、国、地域でこういう人を育てたいというより、一人一人の個人が日本語学校に通って身につけたものを使ってできるだけ幸せになってほしいと思っている。どのような環境でもくじけず、へこたれず生きてほしい。日系人を育てたいと思っているわけでない。現場としては、日系、非日系は関係ない。日本語学校に来てよかった、楽しかったと思って、結果的に、地域、国に役立てればいいと思う。(ブラジル・渡辺)

3.2 課題②：まとめ

南米の言語的・文化的資源を基盤とした南米の日本語人材像として、ブラジル/日本、日系/非日系など、言語、文化、世代による分断をつなぎ、調整し、さらには新たな関係を創造する人材の育成が期待されているようである。特に南米の多様で豊富な言語的・文化的資源の中で生きる「子ども」や、日本と南米各国を往還する「帰国生」は、南米・ブラジルのみならず日本、世界の資源といえるだろう。これらの人材が形作る社会については、議論する時間がなかったが、他者に関かれ、柔軟であると同時に、忍耐強く差異を許容し、包括する社会・集団となろう。ただし、教育現場の基本は個人にあり、学校は個人の可能性を実現する能力を育成する場所である。このような個人の資質を育成するには時間が重要な要件であるが、短期的な教育効果が求められる現場ではその実現は困難であろう。このためには、学習者、両親、地域などが日本語教育の価値を認めて、地域の「言語資源」「文化資源」「人的資源」をじっくり育てるという信念が必須だろう。

4. 日系社会と日本語教育の今後（課題3）

課題③

日系社会は日本語をどのように位置づけ、どのような日本語教育を目指すか。

4.1 課題③：報告

ブラジル、南米の多くの国の日本語教育の起源となっているのは、日系人子弟に対する日本語教育であり、現在でも日系社会は南米各地の日本語教育の言語資源、人的資源となっている。日系社会の言語状況は世代を経るごとに変化しているが、このセクションでは、2017年時点の視点から、今後の日系社会と日本語の関係をどのようにとらえるのかを議論した。

まず、ボリビア、パラグアイの日本語教師パネリストから、オキナワ移住地、アマンバイでは、2017年現在でも、日本語が日系社会のコミュニティ言語として機能しており、コミュニティ内の絆、あるいは日本とコミュニティの絆であると紹介された。日本語学校は言語、文化

を伝える資源であり、中核的人材を育成する機関としてある。

- ・ 日系人をつなぐツールが日本語。日系人は日本語を話すのが当たり前で、二世は日本語で話せるし、三世も 16 歳以上なら日本語は話せる。中学卒業後、青年活動をするがその時も日本語を使う。オキナワ移住地は 60 周年を迎えたが、沖縄県から「世界の若者ウチナンチュ連合会」で未来会議を開いた。(中略) 日本語は、コミュニティ内言語であり、沖縄とボリビアをつなぐことば。今でも、高校生、大学生も日本語で話しており、今後も可能だろう。(井上・ボリビア)
- ・ 日本人としての誇りを持って育つことが移住当時の目標であった。学校では移住者のことを伝え、文化、習慣を伝え、学校や日本人会が資源となり、リーダーを作る努力をしている。いつか彼らが、日本人会の世代交代として維持できることを願っている。それが日本語、習慣を伝えていく。ことばを覚えることで習慣を覚える。アマンバイでは日本語がコミュニティ言語として使われているが、子どもも親も日本語を使う人が減少していることが大きな課題である。日本語を学ぶことで、日系人でも非日系でも、日本文化の担い手となることを願う。(秋山・パラグアイ)

一方、自身がブラジル日系 2 世で複数言語状況の中で育ったモラレス松原は、言語・文化のハイブリッド性を積極的に評価することを提案する。ハイブリッド性の肯定は、人間を固定的な民族、そして民族に規定された言語に関係づける近代的なイデオロギーの否定といえるだろう。この近代的な民族-言語イデオロギーは、日本人（日系人）と日本語を無批判につなぎ、日本語ができない日本人（日系人）のアイデンティティを傷つける。日系人だから、二世だから、三世だからといった議論ではなく、日系社会のハイブリッドな現状を肯定的に評価し、新しいものを作っていると解釈する。

- ・ わたしは、ブラジルに生まれて、バイリンガルで、最初は日本語、そのうちポルトガル語に触れて、生活しているうちにポルトガル語が強くなった。(略) 日本語教育についても、日本語ができる子どもを対象に教え始めた。(略) 継承語教育をしているところは、教授能力よりも言語能力が優先される。二世は日本語ができない、気が利かないなど言われ、傷ついた。日本語が上手な人が教えるのが上手だと思われるが、今では、マルチモダリティで、教授能力が重要。学習者も日系、非日系の境界もなく、日本語だけでなく、日本語を通して、日本の良いところを学ぶ。(略) 個人の言語能力の評価は、繊細で人を傷つける。二世、三世など世代から、日本語能力は判断できない。四世では帰国生もいて日本語ができる。日系ブラジル人は、ハイブリッド化し、日系コロニア語もハイブリ

ッドである。日系のいいところ、セルフエスティームを高める活動をしたい。コロニア語は将来は正しい日本語になるかもしれない。ブラジルと日本は、文化も距離も遠いが、それを統合し、新しいものを作っている。(USP・モラレス松原)

ブラジル日系社会の調査をしている細川も、日本語・日本文化の担い手の多様化を指摘する。

- ・ 日本人会の新しい動きを紹介すると、日本人会青年会会長が非日系が多い。非日系、日系区別なく、楽しいことをやる。ブラジル人の会長に会うと流暢な日本語であいさつする。血にこだわらず日本が好きの人が集まるのが日系人青年部でいいのではないか。ブラジルの日本語教育は日系コロニアから生まれ、保ってきた。日系社会をベースにしていたが、壁にもなってきた。日系、非日系は関係なくやっていくといい。(細川・人文研)

日系社会は各国、各地域、各機関でそれぞれ状況が異なる。それを支援する JICA、JF、CBLJ、あるいは大学といった団体パネリストからは、各機関の強みと制限を考慮しながら、各機関と協働していく意思を確認した。しかし、現在、それを可能とする組織がない、という指摘も出された。

- ・ JICA の日系支援は、日系団体の考えに沿って、できることをやるというスタンス。これからも、JICA の紹介と提案をし、日系社会の要望を聞きながら、JICA ができること、協力できることを考えていく。日系社会と一緒にやっていくというスタンス。(略)「日系社会の活性化」が JICA の日系社会支援の目的であり、同目的は日系団体からも聞く。ただ、どうやったら活性化するのが問題。何をしたらいいのかわからないでいる。それを一緒に考えていく。(略) 現在、ボランティアが 100 名いて、半数が日本語教師。しかし、ボランティア応募者が減っており、ブラジルからの要望には半分くらいしか応えられていない。日本語教育以外の職種でも、社会福祉、スポーツ、文化など協働できる職種もあるので対応を検討してほしい。(中野・JICA)
- ・ 外務省、JF、JICA の活動は法律で規定されており、できることとできないことがある。ただ、そこで立ち止まらずに、相談してやっていきたい。JF も JICA もしたいことを投げるので、一緒にやりたい。(洲崎・FJSP)
- ・ 教師養成が CBLJ の仕事。このシンポジウムで「どきどき、わくわくする日本語教育」という考えが出たときに、それができる教師を育てるのが CBLJ の仕事。教師は教えるものでなく、生徒と学びあうものである。今後の研修の方向性も変えたい。CBLJ は現場の教師ととともに作っている。日系のみならず、非日系の教師の意見も取り入れてやっていく。

(鶴田・CBLJ)

- ・ ブラジル社会に認められた資格、認定づくりを各機関・団体で協力して作るといい。サンパウロ大学は大学院もある。パラグアイ、ボリビアの先生も入学できる。南米には資源が多いかもしれないが、資源同士のコミュニケーション、アーティキュレーションがない。また、日本語教育の研究もブラジルの現場をみつめた実態把握から、ニーズ分析に至る応用言語学的な研究に進化すべきと思われる。理論の裏付けは大事であるが、理論を整理するだけではなく、現場をテーマに、正しく記述することから、正しい分析がされ、最終的には現場に還元できる研究になるのが望ましい。(モラレス松原・USP)

4.2 課題③：まとめ

「日系社会と日本語」というテーマは、日系社会の歴史や地域性を反映し、あらためて多様な状況が確認できた。ブラジル、パラグアイ、ボリビアの日系人移住地の歴史を持つ地域の一部では、日本語は未だ、コミュニケーション言語として機能し、家庭、地域で使用されている。一方で、言語、文化が混在し、新しいものが生まれていく中で、日本語の機能を考え、日本語を使用する人間像を追及する考えもある。このように多様な日本語教育事情を考慮すれば、それを支援する各団体は、各機関と対話を続けながら互いに目指す状況を実現するしか方法はない。そのためには、それら個別の資源をつなぐ協働のプラットフォームの構築は今後の課題となるだろう。

5. 日本語教育の中長期的な目標、課題とは? (課題 4)

課題④

日本語教育の中長期的な目標は何か。それを実現するために、どの団体がどのような形態で臨むべきか (日系団体、研究機関、CBLJ、大使館、JICA、JF の役割)

最後のセクションは、今後の問題意識とその対応について議論した。

5.1 課題④：報告

5.1.1 問題提起：日本語学校での学習者減少→日本語教育を盛り上げたい

まず、民間の日本語学校の学習者の減少を懸念し、日本語教育全体の振興を促進する提案があった。具体的には日本語学校の価値の社会的認知が課題とされた。日本語教育関係機関が一堂に会した今回のシンポジウムは前例がないことで大きな契機であるが、続けていくのが肝要であるという意見が出た。

- ・ 日本語学校、中等、大学など、すべての日本語教育を盛り上げたい。ブラジル全体の学習者数、特に成人非日系学習者の増加の傾向は、それはいいことであるが、ただ、今までブラジル日本語教育中心だった民間日本語学校の児童は減る一方で、学校も減る一方で止まらない。これはどうかしなければならない。日系日本語学校の活動が正統に評価され、なくしてはいけない。時代の流れだから、子どもが減ってきたから、家庭で日本語が使わなかったから、二世、三世だから、しょうがない。というのでは、あまりにももったいない。ただ、もっとやることがあるはず。一番の問題は、日本語学校の良さを、どのように社会に知ってもらうのかが問題。今まで、様々なイベントがあったが、その時は盛り上がるが、続かない。2008年10年前のシンポジウムはCBLJでやったが、今回は、JF、JICA、CBLJ、科研、人文研、大学と、日系人協会、マスコミのサンパウロ新聞、ニッケイ新聞が参加して、オールスターである。ブラジルにきて20年だが、こういったことは初めて。それまではそれぞれが活動していたが、今回はテーマに基づき、一つのほうを向いている。今から10年前も盛り上がったが、次の年は冷めてしまった。今回はこの流れを失いたくない。日本語ブームを作りたい。(渡辺・ブラジル)

5.1.2 今後の対応、提案：日本語学校での学習者の減少→日本語教育を盛り上げたい

上記、問題提起に対し、「アドボカシー」「アセスメント」「ブランディング」「スターづくり」「ご当地キャラづくり」といったアイデアが寄せられた。

- ・ JFではアドボカシーを行っているが、その際、「なぜ日本語を学習することのメリット」というパンフレットを作って、教育の行政責任者に持って行っている。こういう問題はいくつかのターゲットがある。親、校長先生、教育行政の担当者がいるので、ターゲットを絞ってアクセスする。マスコミは一般的な認知は上がるが、直接的な効果があまりなかった。戦略的にターゲットを絞ったほうがいい。(洲崎・FJSP)
- ・ 子どもが減っているということもあるが、逆に経済的にうまくいっている学校もある。民間の学校で学習者が増えているのは非日系を集めている機関なので、ターゲットを考慮して対応してはどうか。(会場参加者)

ターゲットを絞り戦略的にアドボカシーをするには、それぞれのターゲットを説得する言葉が必要となる。この点について、「アセスメント」の重要度について提案があった。また、日本語教育のアピールのための「ブランディング」についての助言もあった。

- ・ 各ターゲットを説得するには、アセスメントや評価ツールを利用すると機能する。公的な証明書や指標を利用して言語能力、文化能力、仲介能力が表現できるといいだろう。人に見える、役所にアピールする証明書づくり。数値がいいのか、記述がいいのか、日本からもアドバイスできるところがたくさんあるので、相談してほしい。(松田・科研)
- ・ ピラールの教育は素晴らしいので、それをブランディングしてアピールしてはどうか。アメリカンスクールは、おしゃれで、かつこよくて、階級が上のようなイメージがある。日本語学校についても、ブランディングをして、アピールできないか。日本語学校はおしゃれだ、ピラールはすごい。ポジティブなイメージを作る。(松田・科研)

その後、日本語パネリストから、イベントについての様々なアイデアが寄せられた。

- ・ 全ブラジルで日本語が盛り上がってほしい。将棋の藤井くんというスターが生まれたおかげで、日本で将棋が流行った。将棋も将来役に立つかわからない。ブラジルの日本語教育でもスターを作りたい。(渡辺・ブラジル)
- ・ 着ぐるみのキャラを作る。例えば、それぞれの地区でご当地キャラを作って、フェスティバルジャパンの際にブラジル代表に作る。南米代表も作る。そして、2020年、東京オリンピックの際にキャラで日本を応援する。(渡辺・ブラジル)
- ・ 地域のキャラクターを作成するときに、地域と日本語の関係を調べたり、地域の人にインタビューをしたりして、日本語も使う。会長に聞いたりして地域も巻き込む。(横溝・ブラジル)
- ・ キャラクターの人形を作り、販売する。(会場参加者・ブラジル)
- ・ 教師の待遇が悪いので、活動を通して、若手教師の支援する資金の材料にする。(横溝・ブラジル)

5.2 その他

その他、アルゼンチンでは、中級が教えられる教師養成が急務であること。ブラジルで日本語教育共通の連絡網を作る必要があるなど、報告、提案があった。

5.3 課題④：まとめ

「日本語教育の意義を多くの人に知ってもらう」という課題は、日本語学校のみならず、どの分野が共有できる課題であろう。対策として挙げられた「アドボカシー」「アセスメント」「ブランディング」「スターづくり」「ゆるキャラ」の他、モラレスが提案した「ブラジル社会に認められた資格、認定づくり」もここに入れられる。ただ、これらの対応も複数の機関、団体の

共同によって可能である。時間のかかる作業もあるので、イベントの興奮や熱が冷めても、粛々と行えるよう、日本語教育が連携できる連絡会議を発足させることが優先事項となるだろう。その他、時間の関係上、多くの課題を扱えなかったが、アルゼンチンの中級レベルの日本語教育の開発など、南米諸地域の課題については、JFや南米各機関が適宜相談しながら、各国の課題をカスタマイズして取り扱う。

6. シンポジウムの総括と今後

まとめとして、シンポジウムで得られた成果と今後の行動計画について、記しておく。

6.1 シンポジウムの成果（「参考資料」も参照のこと）

- ・ 日本人移住、多様な言語文化、帰国生の往還など、南米が持つ歴史を基盤に、南米が持つ言語的、文化的資源が明らかになった。
- ・ 上記、資源を元に、断片化しがちな現代社会の間を、つなぎ、調整し、新たな関係を創造する人材という「日本語人」の人材像が確認できた。
- ・ 従来の日本語教育の対象であった「学生」「一般」以外に、「子ども」「帰国生」を南米特有な学習者群として個別に認識できた。
- ・ 2017年現在の日系社会の言語状況の国、地域による多様性が認識できた。また、民族とことばの関係を支配する言語イデオロギーを問い直し、「ハイブリッド性」など、日系人の多言語状況を肯定的にとらえる概念形成の重要性も確認できた。
- ・ 日本語学習者の増加の一方で、民間日本語学校の子どもの減少が「止まらない」現状とその危機感を共有した。これについて、「アドボカシー」「アセスメント」「ブランディング」などの手段を講じ、理解者を増やしていく方法が確認できた。
- ・ 本シンポジウムは、日本語教育機関とその支援団体、関係団体が集まり、日本語教育の課題について議論ができた初めての機会であった。今後も、南米、ブラジルの日本語教育の個別のニーズに対応するため、共同で対処することを確認した。

6.2 今後の行動計画

上記、成果を受け、以下の行動計画を挙げる。

- ・ 日本語教育関係者が共同できる連絡会議の設立
- ・ オラシー、文化能力など、南米の日本語教育の能力が表現できるアセスメントの開発、調査、公開
- ・ 子ども、帰国生など、年少者に対する日本語教育研修者のネットワーキング、研究、調査

- ・ 「スターづくり」「ご当地キャラ」など、日本語教育をアピールするイベントの実施

7. おわりに

最後にシンポジウムの発案であり、パネルディスカッションの進行をした報告者の個人的な想いを記して本稿を締めたい。

本パネルディスカッションで、報告者にとって最も印象的であったのは、日本語学校の生徒や機関そのものが減り続け、その傾向が「止まらない」という、その切実な危機感である。この危機感は、「昔からある学校がなくなる」「生活ができなくなる」といったものではなく、「何か大切なものが消えてしまう」という危機感だろう。報告者自身もブラジルの各機関を訪問し大きな感銘を受けつつ、同時に「何か大切なものがなくなりそうだ」という「危機感」を共有した。しかし、言語選択とその習得は個人の権利であり、時代の変化を無視することはできない。「昔からあるから」「日系人だから」日本語教育を促進するには説得力に欠ける。「何か大切なもの」とは何か、どうしてそれを続ける必要があるのかは、無自覚に遺産を引き継ぐのではなく、未来のビジョンに向けて問う課題となる。このため、「資源」という概念をキーワードに日本語教育の様々なアクターに、この問題について投げかけた。この課題が日本語教育の主要なアクターに共有されれば、スタートとしては成功と言えるのではないだろうか。

このため、パネルディスカッションでは、90分という時間の制約があるにも関わらず、13名のパネリストを並べた。このため、各パネリストは発言時間が十分に取れず、議論も深めるまでにはいかなかった。これは、企画者であり当日の進行を勤めた報告者に非がある。ただ、これだけ多くの日本語教育関係者が、議論した事実は評価したい。それぞれの目的を持った機関による共同事業は、継続が非常に困難である。特に JF、JICA など、人の入れ替えがある組織が含まれると一層困難である。よって、シンポジウムの最終日にずらりと並んだ姿とその発言内容の記録を、2017年時点の道標として残したかった。この記録が、南米の日本語教育の今後を考えるための一つの足がかりとなればと思う。

【参考資料】



